明倫紀要 18 (2)　3-10　(2015)

総　　説

古代エジプト人と死者

内田杉彦
明倫短期大学　歯科衛生士学科

Ancient Egyptians and the Dead

Sugihiko Uchida
Department of Dental Hygiene and Welfare, Meirin College

キーワード：古代エジプト，死者，祖先
Keywords: Ancient Egypt, the Dead, Ancestors

1. はじめに

古代エジプトは，死後や来世の信仰が大きな比重を占めた文明だった．死後のため遺体を保存するミイラ製作はこの信仰のあらわれであり，王や貴族の墓が神殿とともに耐久性のある石材で造営され，代表的な遺跡として今日まで残されているのも，神々の世界と来世こそ永遠の存在（であるべき）だという当時の価値観によるものであろう．当時の遺物として現存する美術工芸品や装身具にも，墓の装飾だったものや，死者の来世のための副葬品だったものが少なくない．こうした副葬品は，ナイルの谷で農耕・牧畜が開始された頃の墓にすでに見出されており，来世の信仰が，エジプトの歴史の当初からすでに存在していたことがうかがえる．

来世の信仰からは，そこに住む（はずの）死者たちの概念が生じる．新王国時代中期（紀元前1300年頃）の墓に刻まれた文学作品『竪琴弾きの歌』にうたわれているように，来世については「最初の始まりの時から，我らの同族の者たちが，みんなそこに憩うている」とされていた[1]．亡き肉親や先祖を含むさまざまな死者は，現世と無縁の存在となったわけではなく，神々と同じく，生者とのさまざまな関わりを保っていたのである．

表１　古代エジプト年表（内田杉彦『古代エジプト入門』岩波書店，2007の年表より）

先王朝時代（紀元前5500～3000年）
王朝時代（紀元前3000～332年）
初期王朝時代（第1～2王朝：前3000～2682年）
古王国時代（第3～6王朝：前2682～2191年）
第一中間期（第7～11王朝：前2191～2025年）
中王国時代（第11～12王朝：前2025～1794年）
第二中間期（第13～17王朝：前1794～1550年）
新王国時代（第18～20王朝：前1550～1069年）
第三中間期（第21～25王朝：前1069～712年）
末期王朝時代（第25～31王朝：前712～332年）
ギリシア系王朝時代（前332～30年）
プトレマイオス朝時代（前304～30年）
ローマ支配時代（前30年～後395年）

2. 死者の姿

古代エジプト人が「死者」をどのような存在とみていたのかを理解するためには，彼らが「人間」をどう捉えていたのかをみる必要がある．「人間」を，「肉体」に「霊魂」が宿ったものとする考え方は多くの宗教にみられるが，古代エジプト人の考える「人間」は，もっと複雑な存在であり，生きるために必要ないくつかの要素からなっていると信じられていた．彼らにとって「来世」とは「現世」の延長であ

原稿受付：2015年４月10日，受理　2015年６月29日
連絡先：〒950-2086　新潟市西区真砂3-16-10　明倫短期大学　内田杉彦　TEL.025-232-6351（内線166）

り，人間が死後に再生するためには，そうした構成要素が保存され，あるいは来世に適したものへと変えられることが不可欠とされていたのである．これら「人間」の主な構成要素とされたのは,「肉体」(ケト),「心臓」,「名前」,「影」，そしてカァ，バァと呼ばれるものであった[2)3)4)].

カァは独自の人格を持たず,「生命力」に近い抽象概念だったと考えられており，カァが人間の「肉体」に宿った状態がすなわち,人間が「生きている」状態とみなされていた.「肉体」に宿ったカァは人間が摂取する飲食物によって補充されながら人間の生活を支え，親から子へと代々受け継がれるとも考えられていた．人間の「死」とは，このカァが「肉体」を離れた状態であり，死者が来世に復活・再生を遂げるためには，離れたカァを再び「肉体」に戻すことが必要とされたのである．

とはいえ，死後の「肉体」はもはや生前の人体とは異なる「遺体」となっている.「遺体」は砂漠にじかに埋めれば自然乾燥によってある程度の外形が保たれることがあったとはいえ，ついには腐敗して骨だけになり，あるいは野獣の餌食となることが多かった．これではカァが宿る「肉体」として理想的とは言えない．そこで古王国時代はじめ（前2600年頃）には，裕福な人々の「遺体」に防腐処置を施して,「(来世のための）肉体」であるミイラとし保存する試みが始められ，このミイラ作りの慣行は時とともに普及していった[1)5)]．古代エジプト人にとって「肉体」は，この世の生活のためばかりでなく来世にも,カァの拠り所として欠かせないものだった．そこにカァが再び宿ることによって，死者は，墓に供えられる飲食物（少なくともそのエッセンス）を摂取できるようになり，生前と同じくカァを補充できるとされたのである．

このカァと同じく人間の「肉体」に宿るとされたバァは，紀元前1500年頃に出現する葬祭文書,『死者の書』の挿絵に，頭部が死者本人，身体は鳥という姿で描かれる．こうした特徴は，バァが死者本人の人格・個性と，鳥のように飛行する能力を持つとされていたことを示す．バァは，人間が生きているときはカァとともに「肉体」に宿っており，生命力であるカァに対して，おそらく「霊魂」に近い存在だったとみられる[6)]．人間の死後は，カァとともに新たな肉体であるミイラに宿るが，カァがミイラから離れられないのに対して，バァは，昼間は自由にミイラから離れ，墓の外に出てどこへでも飛んでいけると考えられていた．バァは神々の祭礼に加わって，捧げられた供物の分け前にあずかり，かつて住んでいた家を訪れることもできたとされている．これは人間が死後に運動・移動の能力を失って闇に包まれた墓の中に閉じ込められることへの恐れ，明るい陽光のもとで死後も暮らしたいという願いのあらわれだろう．

バァはさらに，死者が来世で生きるために大切な役割も果たすと考えられていた．カァの宿ったミイラは（防腐処置がなされていても）腐敗などで失われる恐れがあり，しかも地下の墓室に納められるために，地上で捧げられる供物からは離れている．そこで貴族など上層の人々の墓の場合，地上に設けられた供養のためのスペース（礼拝室とその正面の前庭）には墓主の彫像や墓碑が設置され，礼拝室の壁面にも墓主の姿が描かれた.これらの彫像や図像は，ミイラと同じく「肉体」の代わりとされてカァが宿り，供物を受けることができるとされていた[7)]．この供物（のエッセンス）は，本来の「肉体」であるミイラまで届けられるのが望ましいが，墓の彫像や図像のカァは，ミイラのカァと同じく動くことができないため，バァがミイラから墓の地上部分まで墓穴を通って飛んでいき，そこから供物（のエッセンス)を持って戻ってくると考えられていたのである[2)]．

バァが死者の再生のために果たした役割にはさらに，古代エジプトの来世思想の柱となった太陽神信仰に関わるものがある．神として崇められた太陽は舟（太陽舟）に乗って，昼は天空，夜は地下の世界をめぐる永遠の船旅を続けると信じられており，当時の人々にとって，死後はこの船旅に何らかの形で関わることが，太陽神のように永遠の時を生きるための鍵だった．バァは，昼間に天空を航行する太陽舟まで飛んでいき,この永遠の舟旅に(昼の間だけだが)同行できるとされており，これもまた，死者が来世で永生を得るための支えになったとみられる[3)4)8)]．

人間の「影」は，死者も持つとされ,『死者の書』の挿絵にも，バァとともに墓から外出する「影」の姿が描かれている．死者の「影」という概念は，陽光に照らされた来世を願う古代エジプト人の心情のあらわれとみることができる．太陽光線によって生じる影を死後も持つことで，太陽神の死と再生のサイクルに関わることが期待されていたのかもしれない[2)]．

カァやバァ,「影」など生前に持っていた要素を併せ持ち，新たな「肉体」であるミイラを与えられ

た死者は，「アク」と呼ばれる「霊」として来世に生まれ変わるとされていた[2)3)4)8)]．新王国時代（前1550～1070年頃）の王墓には，墓の中で眠る死者たちが，夜になって地下の冥界におりてきた太陽神の光を浴び，アクとしてよみがえる様子が描かれている[3)]．彼らは太陽神の光を浴びて生涯をすごし，この神が地上へと去っていくと再び眠りにつくとされた．現世の夜が来世の昼となり，死者が過ごす一生となって，永遠に繰り返されるという，この太陽神の船旅による死と再生の概念は，古代エジプト人の来世信仰を支える柱のひとつとなったと言える[3)4)8)]．このサイクルを通じて再生する死者（アク）の姿は，基本的には生前のそれと同じであって，中流以上の人々の場合は，彼らの墓に安置される彫像や墓碑，墓壁画や墓浮彫などに表されるように，白い亜麻布の衣服を着て，鬘や装身具を身につけており，人生における理想像である若者の姿をとるのが一般的だった[2)7)]．

こうした墓主の彫像や図像には，彼らの生前の（官僚や貴族としての）官職や称号，名前を記した銘文が添えられており，そこに表されているのが誰なのか，どういう地位や立場にあった人物なのかが明らかにされている．人間の構成要素のひとつである「名前」には，王や神々の名を含むもの，祖父母や両親の名を受け継いだものが数多く見られ，人間と社会，祖先や家族との関わりがそこに示されている．

墓主の「名前」が生前の肩書きとともに，墓に残されたことは，死者が依然として社会や家族の一員とされていたことを暗示している．アクとなった死者と遺族の関係は，遺体の埋葬後も，遺族による供養によって保たれた[2)3)4)]．こうした遺族からの働きかけは一方通行に終わるものではなく，アクは彼らの祈りに応え，願い事を聞き届けると信じられていた．供物をじかに受け取るカァが人格のない「力」にすぎず，バァや「影」も，人間の言葉を話すとは考えられていなかったのに対して，来世に住む死者（アク）は，現世に生きる人間と交流ができると信じられていたのである[2)3)4)]．

以上のような死者との関係は，墓や墓碑を残し，自らの信仰について文字記録を残すことのできた人々，古代エジプト人のうちでもごく少数の中流以上の人々について言えることであり，当時の人口の大多数を占めた庶民が来世や死者をどう考えていたかについては不明の点が多い．しかし，新王国中期（前1340年頃）に都の置かれたアマルナで発掘された下層階級の墓地では，小さな墓碑のほか，飲食物を入れていたとみられる土器の破片が発見されており，このような人々も来世を信じ，質素ながらも死者の供養をしていたことがうかがえる[2)9)]．

とはいえ，死者のすべてがアクとして復活できるわけではなかった．王に対する反逆などの大罪をおかし，神々の敵とされた者たちは墓を壊され，文字に記された名前も抹消されて忘れ去られ，あるいはその悪名のみを後世にとどめることとなった[2)]．中王国時代初期（前2000年頃）には，来世を支配するオシリス神の「審判」をあらゆる死者が受け，生前に罪をおかさなかったことを神々の前で誓わなくてはならないとされるようになる[3)4)8)]．死者の傍らでは，その記憶や理性の宿る「心臓」が，真理や正義を象徴するダチョウの羽とともに秤にかけられ，死者の誓いに嘘があれば秤は釣り合わず，「心臓」は怪物に喰われてしまい，死者の存在は「無」となってしまうとされた．また新王国時代の王墓内部に描かれた冥界の場面には，罪人たちが斬首され，火あぶりにされる「地獄」の光景が表現されており，彼らの魂が単に消滅するのではなく，永遠に責めさいなまれるとも考えられていたことがうかがえる[3)8)]．

これら罪人の魂にくわえ，不慮の死や非業の死を遂げた者たち，しかるべき供養を受けられなかった者たちは，人々に害をなす「悪霊」になりかねないとされていた[2)]．このような死者には，殺害された者や毒蛇に噛まれて死んだ者，溺死した者，鰐に喰われたため「肉体」の保存が不可能となった者のほか，貧しさのため埋葬してもらえずに遺体を放置され，水路やナイルに捨てられた者も含まれていたであろう．こうした悪霊は，流産や病気，悪夢など，当時の人々の理解の及ばない災いを引き起こす元凶とされて，病気をもたらす悪霊に対抗する護符や呪文が作られ[2)10)11)]，「吉凶暦」には，悪霊が墓地を徘徊して出会う者を不治の病にするという凶日が記された[12)]．

新王国時代の王墓には，世界を取り巻いているとされた混沌の水の拡がり（ヌン）のなかに力なく漂う死者の魂が，神の助けにより永遠の生命を獲得する場面が描かれている[3)8)]．エジプトを流れるナイルや水路の水はこのヌンを水源とすると信じられていたから，ヌンに漂う死者の魂は，溺死者や，満足な埋葬・供養がされなかった死者のそれを指すとみることができるだろう．このように不運な死者の救済の概念が生じた背景にはおそらく，罪を犯すこと

なく正しく生きた人間は，死後の備えがなくても再生の望みがあるとする信仰があったのだろうが[8]，そこにはまた不慮の死，非業の死を遂げた人々が「悪霊」となることへの恐れ，そのような事態を可能な限り防ぎたいとする願いもあったのかもしれない．

しかし，人間に害を及ぼしかねないとされたのはそのような「悪霊」ばかりではなく，来世に問題なく復活し，永遠の生命を享受しているはずの死者の霊（アク）も，トラブルを起こす可能性があると信じられていた．たとえば新王国時代の呪術文書には，人間に悪夢を見せる「悪霊」やアクに対抗する呪文が記され[2)11)]，当時の文学作品『アニの教訓』には，家畜や穀物の盗難，家庭内のもめ事のほか，人が無気力に陥ることもアクの仕業であるから，アクを満足させ，アクの嫌うことをしてはならないという教えが含まれている[2)13)]．

アクは供養をする遺族を守る一方，生者に対して悪意を抱き害を加えることもありうるとされ，それを防ぐためにも，アクに敬意を払い，しかるべき供養をすることが必要とされていたのである．古代エジプト人が死者の霊（アク）に抱いた感情には，遺族や子孫としての親愛の情と，死者に対する恐れという，相反する思いが同居していたと言える．

3. 死者との交流：葬儀

貴族など中流以上の人々の墓の壁画や浮彫，『死者の書』の挿絵には，墓主の葬儀の場面がしばしば描かれる[2)3)]．葬儀は，死者を来世に復活させるために必要であるだけでなく，死者と家族，社会との絆を回復するための大切な第一歩であり，それを滞りなく行ったことを記録に残すことが，死者の再生・復活のために意義のあることとされていたのだろう．

この葬儀の場面には，遺体と副葬品を墓地へと運ぶ葬列が描かれる．葬列はまずミイラ工房に向かい，そこでミイラとされた遺体を墓まで運ぶ．葬列には，故人の親族や友人，葬儀をとりおこなう神官，そして，地面の砂を頭にかけて夫である墓主の死を嘆き悲しむ未亡人のほか，彼女と同じように悲嘆の感情を表現する一群の女たちが加わる．彼女たちは，現在のエジプトの葬式でも見られる「泣き女」で，墓主夫婦の親族か知人，あるいは哀悼を職業とする人々とみられる．この「泣き女」が葬列に加わることには，人間の死が遺族だけでなく社会にとっても損失であることを示し，遺族の悲しみを共有・軽減するという意味があったと言える[2)]．

葬列が墓に到着すると，ミイラを納めた棺は墓の礼拝室の入口に立てかけられて，その足下には未亡人がくずおれ，泣きながら棺をたたいて悲しみを表し，「朗唱神官」が呪文を唱え，死者のための一連の儀式が行われる[2)3)]．葬儀全般を取り仕切るのは豹の毛皮をまとう「セム神官」だが，この役割は，墓主の後継者となる人物，一般にはその長男が引き受けるのが建前だった．死者の相続人となるためにはその葬儀を行って死者の再生に貢献することが条件とされており，長男がその中心的役割を果たし兄弟姉妹も協力することで，死者の地位や財産は一族のもとにとどまり，代々引き継がれていくこととなる[14)]．葬儀は当の死者のためだけに行われたのではなく，家や子孫が続いていくためにも必要だったのである．

墓前の儀礼を代表するものとしてしばしば葬儀の場面に描かれる「開口の儀式」は，「肉体」の機能，とりわけ来世で飲食物を摂取し，呼吸をし，言葉を発するための機能をミイラに与えるのを目的としており，神官たちが手斧などでミイラの口を象徴的に「開く」儀礼をおこなった[2)3)]．やはり死者の「肉体」とされた彫像や墓碑などに対しても「開口の儀式」はなされたとみられる[7)]．

これに続く「供物奉献儀礼」では，いまや「使用可能」となったミイラや彫像，墓碑の前で香が焚かれ，生命力を秘めるとされた水が注がれて，供物が捧げられるとともに，供養文，とくに「声による供物」と呼ばれる呪文が唱えられた[2)3)]．この呪文は，食物や衣類などが死者のカァに与えられるよう祈願するもので，この呪文を唱えれば，そこに名が列挙されている供物が死者のもとに届くと信じられていた．この供物奉献儀礼は，この後も，供養として繰り返されていくこととなる．

これら墓前の儀礼のあと，ミイラを納めた棺は地下の墓室へと降ろされ安置されて，墓坑が埋められ，葬儀の参列者たちは墓の前庭で会食をおこなったが，そこには死者も同席するとされていた[2)]．会食が終わると，礼拝室の扉が閉められ，参列者たちは家路につくのである．ただしこのような葬儀の状況は，それを描く壁画や浮彫を残せる一部の人々にあてはまるものであり，その他の人々の葬儀は身分に応じて簡素なものとなったであろう．

4. 死者との交流：供養

墓は，遺体（ミイラ）の埋葬所だっただけではなく，死者の霊（アク）が生者と交流を持つ場所でもあった[2)3)]．墓の浮彫や壁画，墓碑には，墓主が遺族から供物と香を捧げられ，花束を贈られる姿がしばしば描かれており，家族の絆を死後も保ちたいという願いがうかがえる．

葬儀が終わった後も遺族による供養は続けられ，「吉凶歴」で定められた日だけでなく，祭日や死者の命日には，遺族による墓参りがおこなわれ，供物や水が墓主に捧げられた．この供養のうち，おそらく祭日に行われたものは，親族ばかりでなく故人の友人・知人も加わって，墓主の霊のために開く宴会となった[2)]．墓の壁画や浮彫に描かれたこの宴会の場面では，墓主夫妻をまじえた列席者たちが，手にした花の芳香や召使から渡される酒，楽師や踊り子の演じる余興を楽しんでおり，なかには飲み過ぎて嘔吐する者の姿さえみられる．宴席には，楽器を演奏しながら歌う盲目の竪琴弾きがしばしば加わっており，彼が歌ったとみられる『竪琴弾きの歌』には，この世を去るその日まで家族とともに人生を楽しみ，心配事は忘れるようにと説く一節が含まれる．このような羽目をはずした宴会は，そこに連なる人々に，短い人生を最大限に活用することの大切さと，家族や友人，亡き肉親や先祖との絆を思い起こさせるためのものだったのかもしれない[2)]．

死者の霊を招いたこのような宴会は，墓の前庭かその周辺で開かれたとみられているが[2)]，日常の供養の場である遺族の家で開かれる場合もあったであろう．新王国の王墓造営職人の村，デル・エル＝メディーナでは，住居の「入口の間」と，家の主人の居室である「中央の間」に，家を守護する神々とならんで一族の死者の霊をまつる場所が設けられていた[2)15)]．壁面には，枠で囲まれた戸口をかたどったものが作られたが，これと同様のもの（「偽扉」）は墓の礼拝室壁面にも墓碑として設けられた[2)15)]．この偽扉には，扉の部分にあたるパネルの周囲に墓主の名前や称号，供養文が刻まれ，パネル上には，供物を前にした墓主の姿が表される．偽扉の正面には，供物をのせる台や献水のための水盤が置かれた．偽扉は死者専用の出入口であり，死者の霊が（おそらくバァの力によって）墓室から偽扉を通って礼拝室に入り，供物を受け取ると信じられていたのだろう．デル・エル＝メディーナの住居内部の「戸口」にも，供物をのせる壇やスタンドを伴う例があり，これらもまた，死者の霊が供養を受けるための「偽扉」だったとみることができる[2)15)]．

デル・エル＝メディーナの住居内部には収納用の壁龕が数多く作られていたが，そのなかには，礼拝の対象となった彫像や石碑を安置する「神棚」，「仏壇」にあたるものもあった[2)15)]．これら礼拝用の壁龕には，死者をまつるためのものもおさめられており，そのような例としてはまず「太陽神ラーの優れたアク」という称号を持つ死者の石碑が挙げられる[2)13)15)]．この石碑には，太陽神の活力を象徴する睡蓮の花を手にして供物卓の前に腰掛ける死者の姿が表されており，その称号と相まってこの死者が太陽神のもつ再生能力を授かった存在であることが示されている．

その称号のなかの「優れたアク」という表現は，彼らが現世に影響を及ぼすほどの強い力を持つことを意味しており，それゆえに恐れられ，家を守る存在として崇められていたことをうかがわせる．事実，「太陽神ラーの優れたアク」が礼拝され供物を捧げられる場面や，彼らが神々と同席し，神々を礼拝する姿を示す石碑も残されており，彼らがその「優れた」力によって，神々への祈願をとりつぐ「仲介者」

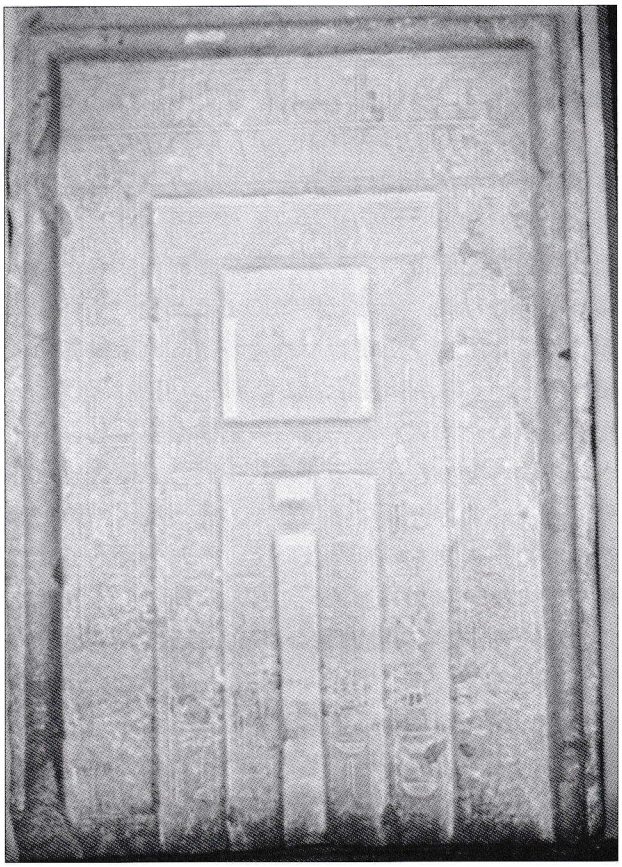

図1　墓の「偽扉」

としても頼りにされていたことがわかる．この「太陽神ラーの優れたアク」の碑は，新王国後期（前1290～1070年頃）のものとみられ，デル・エル＝メディーナばかりでなくエジプト各地で発見されており，新王国後期の死者崇拝のひとつの形態とみることができる．

デル・エル＝メディーナからはさらに，やはり壁龕にまつられたとみられる人物胸像（「祖霊胸像」）が発見されている[2)15)]．この胸像のほとんどは称号や名前などの銘文をもたず，誰を表したものかについては研究者の間で意見の一致をみていない．現在のところ，過去の祖霊を何代もさかのぼって集合的に表したものとする説が有力だが[2)]，むしろ近親者のカァが宿る「肉体」であって，新たな死者が出るたびに「持ち主」が交代したから，個人名が記されなかったという解釈も可能だろう．この胸像も，デル・エル＝メディーナのほかエジプト各地で発見されているだけでなく，なかにはおそらく護符として携帯されたとみられる小さな作例もあって，民間信仰の対象としてかなり普及していたことがうかがえる[2)]．

死者のための供養はいつまで続けられたのだろうか？中流以上の人々のなかには，何世代もさかのぼる先祖の名を自分の墓に記した例も見られるが，これは先祖の供養であるとともに，自分の社会的地位の基礎となる家柄を示す行為でもあって，比較的稀なことだった[2)]．身内の死者に対する記憶は死後およそ二世代もたてば薄れていき，新たな死者が埋葬されてその供養が開始されると，より古い世代の死者の供養は徐々に行われなくなっていっただろう[2)]．遺族の負担を軽減するため，葬祭神官にあらかじめ領地を分け与え，その収穫物による供養の代行を依頼することもたびたび行われたが，これも供養の継続期間をいくらか延長したにすぎないと思われる[2)3)]．国家祭祀のための神殿に自らの彫像を奉納し，神々への供物の分与に預かる「永代供養」を確保した者や，神々への仲介者などとして，死後も人々の信仰をあつめた人物もいたとはいえ，それらはあくまで例外的なケースであった[2)]．故人について書き残すこともなく，充分な財力もなかった庶民の場合には，死者の供養はもっと早く行われなくなったに違いない．古い世代の死者は新たに世を去った者に場所を譲って，遠い過去の存在となった先祖の仲間入りをするとされていたのであろう．中王国時代（前2020～1800年頃）の葬祭文書『コフィン・テキスト』には，新来の死者が亡き父親に対してその地位を譲ることを求め，その代わりに自分が父親を守るとする呪文があり，死後に起きるであろう「世代交代」を，当時の人々が意識していたことを示している[2)16)]．

5. 死者との交流：「死者への書簡」

亡き配偶者や肉親にあてて遺族がしたためた「書簡」は，古代エジプト人と死者との関わりを物語る直接的な資料である[2)13)17)]．古王国末期から千数百年間にわたって書かれ続けたこの「書簡」は，自分たちでは手に負えない問題に直面した遺族が死者の助けを得るため墓に「投函」したもので，多くは通常の書簡のようなパピルスか（おそらく必ず読んでもらえるようにという願いを込めて）供物容器に記された．何通かの「書簡」には，相手に自分との親しい間柄を思い起こさせるくだりや，相手の冥福を祈り安否を尋ねる言葉のあとに，なぜ自分の訴えに応えてくれないのかという不満の言葉が続く．「死者への書簡」は，死者に何度も祈ったものの，効き目がないのに業を煮やした遺族が訴えの内容を文書にしたものだったのだろう．

「書簡」に書かれた頼み事は，多くの場合，家族に子供が生まれるよう助けてほしいというものと，家族を苦しめるトラブルの原因とされた「悪霊」や他のアクを，来世の法廷に告訴してほしいというものである[2)13)17)]．トラブルの内容は，家族や使用人の病気や悪夢から，一族の存続に関わる財産の横領にいたるまでさまざまである．子宝が授かるようにという願いの背景にあったのは，来世に再生を遂げた死者は，生命力（カァ）を子孫に分け与える力を持つという信仰とみられる．

「書簡」にはさらに，自分は相手に（その生前から）敬意を払い供養も怠っていないのだから，自分を助けないのは不当だとする抗議ばかりか，もし遺族への助けがなければ家が成り立たなくなり，供養もできなくなるという脅しに近い言葉さえ記されている[17)]．

「書簡」に記された遺族の願いはかなえられたのだろうか？もしそうなら「書簡」はもはや不要となって廃棄され，感謝の思いを込めた供物が代わりに墓に置かれていたであろう[2)]．事実，もし願いをかなえてくれたらさっそく特別の供物を整えようという約束が書かれた「書簡」もみられる[2)18)]．遺物として残された「書簡」は，死者への遂にかなわなかった願いの名残であり，遺族は，返事の来ない「書簡」をそのまま墓に残し，同じ願い事を今度は，もう少し頼りになりそうな神々に託したのであろう．

生前に親しい間柄だった死者に手紙を書くという行為は，死別にともなう喪失感や罪悪感，怒りを軽減するのにも役立った可能性がある[2]．「死者への書簡」に記された，死者に対するいらだちや非難は，頼るべき相手がもはやそばにはいないという悲しみ，自分があとに残された寂しさのあらわれでもあると言えるだろう．それを良く示すのは，デル・エル＝メディーナ職人村の書記だったブテフアメンの記した「死者への書簡」である[19]．石灰岩の破片に記されたこの「書簡」は，亡妻の遺体を納める棺にあてて書かれたものであり，棺の中の妻への伝言を託す形になっている．それは，美しく気だての良かった妻が今や自分のもとを去り，問いかけても応えないので寂しいという嘆きで始まり，自分が災難に見舞われたときも，彼女からの助けはなかったことが語られる．そして，自分のもとに来られるよう神の許しを得てほしいという願いと，亡き妻のいるところでは「自分の言葉が聞こえる者が誰かいるのだろうか」という問いかけが記されている．ここには，亡妻からの助けを求める願いよりもむしろ，愛する伴侶を失った悲しさ，語りあう者のない孤独感が示されており，訴えの届かない来世に対する不信の念さえうかがえるのである．

6. おわりに

死後に永遠の生命を得ることを夢見ていた古代エジプト人の墓がいまや廃墟となり，永久に眠りにつくはずのミイラが多くの副葬品とともに姿を消し，あるいは博物館の展示ケースに収まっていることは，諸行無常を感じさせる．

しかし墓や副葬品がいつまでも本来の持ち主のもとにとどまるものだとは当時の人々も信じてはいなかった．他人の墓から石材を切り出してはならないと説く教訓は中王国時代はじめ（前2000年頃）にみられ，「優れたアク」である自分の墓を壊す者は来世の法廷で裁かれ，恐ろしい罰を受けるだろうとする警告は古王国時代後期（前2300年頃）の貴族の墓にしばしば刻まれている[2)20]．これらは，古い墓を再利用する風潮が早くからあったことを物語るものにほかならない．事実，新王国時代以後の墓には，以前の墓を再利用・拡張したものが数多く確認されており，墓が遺産として受け継がれた結果，何代もの子孫の数十体におよぶミイラを納める集団埋葬墓となったり，子孫が絶えて忘れられた墓が正式な手続きのもとで他人に譲られることもあった[2)13]．

墓荒らしも，当の古代エジプト人によってすでに行われていた．王権が衰えをみせた新王国後期（前1120年頃）には，王墓や上流の人々の墓をねらった墓泥棒が頻発し，農夫や船頭，職人から神官までさまざまな階層に属する犯人が捕えられている[2]．身分と貧富の差が厳然と存在していた当時の社会では，とくに中流以下の人々の間で，死者に対する畏怖や，墓荒らしに課せられた重い刑罰を恐れる感情よりも，墓にみすみす「埋め殺し」にされている財宝で，生活を少しでも楽にしたいという願望がまさることがあったのだろう．来世のために墓や副葬品といった「物」が必要という信仰が，皮肉にも，盗難や再利用の原因となったのである[2]．

このような事態に直面していた古代エジプト人は，どうして墓の造営や副葬品の製作，ミイラ作りをやめなかったのだろうか？来世に必要な「物」が準備されて，しかるべき埋葬，人々の記憶にとどまる限りの供養が行われれば，死後のために用意された「物」がどうなろうと，それは来世に復活を果たした死者の運命を左右することはないとされていたのかもしれない[8]．死者は，子孫が代を重ねるごとにその記憶から消えていくが，決して「無」の存在となるわけではなく，数知れぬ祖霊のひとりとして不滅の存在となったのである．

＊本稿は，2014年度明倫短期大学公開講座（第3回，2014年11月29日）の講演内容に，加筆・修正を施したものである．

文献

1）Lichtheim, Miriam : Ancient Egyptian Literature. Vol. 2, 116. University of California Press, Berkeley, 1976
2）Harrington, Nicola : Living with the Dead : Ancestor Worship and Mortuary Ritual in Ancient Egypt. Oxbow Books, Oxford and Oakville, 2013
3）D'Auria, S., Lacovara,P. and Roehrig,C. H. : Mummies & Magic : The Funerary Arts of Ancient Egypt. Museum of Fine Arts, Boston, Boston, 1992
4）内田杉彦：古代エジプトの「死後の世界」．明倫歯誌，5（1）：58-63, 2002
5）内田杉彦：ミイラ―永遠の生命がやどるもの―．

明倫歯誌, 12 (1) : 43-50,2009

6) Allen, James P. : The Debate between a Man and His Soul : A Masterpiece of Ancient Egyptian Literature, 3-6. Brill, Leiden and Boston, 2011

7) 内田杉彦 : エジプト美術入門. 明倫歯誌, 4 (1) : 76-81, 2001

8) Wente, E.F. : Funerary Beliefs of the Ancient Egyptians : An Interpretation of the burials and the Texts. Expedition, 24 (2) : 17-26, 1982

9) Kemp, Barry et al. : Life, death, and beyond in Akhenaten's Egypt : excavating the South Tombs Cemetery at Amarna. Antiquity, 87 : 64-78, 2013

10) Allen, J.P. : The Art of Medicine in Ancient Egypt, 108-109. The Metropolitan Museum of Art, New York, 2005

11) Borghouts, J.F. : Ancient Egyptian Magical Texts, 3-7. Brill, Leiden, 1978

12) Bakir, Abd el-Mohsen : The Cairo Calendar No.86637, 47-48. Antiquities Department Of Egypt, Cairo, 1966

13) McDowell, A.G. : Village Life in Ancient Egypt: Laundry Lists and love Songs, 68-69, 71-73, 104-107. Oxford University Press, Oxford, 1999

14) Janssen, Jac. J. and Pestman, P. W. : Burial and Inheritance in the Community of the Necropolis Workmen at Thebes (Pap. Bulaq X and O. Petrie 16) . Journal of the Economic and Social History of the Orient, 11 (2) : 137-170, 1968

15) Lesko, Leonard H. (ed.) : Pharaoh' s Workers: The Villagers of Deir el Medina, 95-117. Cornell University Press, Ithaca and London, 1994

16) Grieshammer, R. : Zur Formgeschichte der Sprüche 38-41 der Sargtexte. Orientalia Lovaniensia Periodica , 6-7 :231-235, 1975/76

17) Wente, E. F.: Letters from Ancient Egypt, 210-219, Scholars Press, Atlanta, 1990

18) Wente, E.F. : A Misplaced Letter to the Dead. Orientalia Lovaniensia Periodica, 6-7 : 595-600, 1975/76

19) Goldwasser, O. : On the Conception of the Poetic Form – A Love Letter to a Departed Wife : Ostracon Louvre 698. Israel Oriental Studies 15 : 191-205, 1995

20) 「古王国時代における『来世の審判』」, 屋形禎亮 (編) 『古代エジプトの歴史と社会』 同成社, 107-130, 2003.